

グランドソフトボール、 全国盲学校野球大会優勝！

皆さんはグランドソフトボールというスポーツを知っていますか。簡単に言うとグランドソフトボールとは視覚障害者のための野球です。今年、僕たち筑波大学附属視覚特別支援学校はそのグランドソフトボールで初の全国制覇を果たしました。

8月18日、僕たちは全国大会の舞台である岡山にいました。晴れの国と呼ばれる岡山だけあって清々しいほどに青空が広がっていました。この日は公式練習日ということで午後から1時間ほど練習しました。夜は抽選会と交歓会がありました。抽選会ではそれぞれの地方で勝ち上がってきた9チームの主将がくじを引きました。交歓会では各学校の代表者がパフォーマンスを交えた



りしながら自分のチームのPRを行いました。抽選会ではピリピリとしていた空気も、そんな交歓会の中で次第に和らいでいきました。僕たちも段々緊張がほぐれ、他校の生徒に話しかけたりして交流を深めました。野球の話や学校の話などをして楽しい時間を過ごしました。

そして、19日と20日に大会は開かれました。初戦は大阪府立視覚支援学校との対戦でした。全国大会という緊張感の中、中々自分たちのプレーができませんでした。それでも僕たちは笑顔を絶やさず、全員野球で初戦を乗り越えました。2試合目からは自分たちの持ち味を出すことができ決勝まで進むことができました。決勝戦では一人一人が持っている力を最大限発揮し競り勝つことができました。

昨年、関東大会の初戦で敗退した僕たちは、この1年その悔しさをバネに誰よりも汗を流し頑張ってきました。それが優勝という最高の形で終わることができて本当に良かったです。また、全国にグランドソフトボールを好きな仲間たちがこんなにも多くいるということも僕は何より嬉しく思いました。

附属視覚特別支援学校
高等部専攻科理学療法科 2年 中妻智也



『手探り』という日常

附属視覚特別支援学校 教諭 柵原千衣



今年度から附属視覚特別支援学校に勤めることになりました。私はこの4月に沖縄から来ました。生まれも育ちも南国の私にとって千葉の4月はまだまだ寒かったのですが、学校周辺の見事に開花した桜を見て、沖縄では味わえない春に感動したのを覚えています。

附属視覚特別支援学校で勤め始めて半年が経ちます。私が以前勤めていた学校は学部の朝礼を教室で行うほど生徒数が少なかったため、こちらの学校に来て体育館に集まる93名の高等部の生徒を目の前にして驚きを隠せませんでした。大学進学に向けて熱心に学習に取り組む生徒が多く、出された課題以外にも予習や復習をして提出してきます。ですから、毎朝職員室の前はちょっとした渋滞が起り、各教科のボックスは生徒の提出物でパンパンにふくれています。その提出物を確認するだけで1日が終わってしまいそうですが、私も生徒のがんばりに応えなければと必死です。

耳の聞こえない生徒たちにとって特に目からの情報は大切で、英語科では主語を青、動詞を赤、目的語を緑、

補語をオレンジで示すという共通のルールをつくって授業を進めています。最初のころ、私は色を間違えたり、新出単語をわかりやすく示そうとルールにはない黄色で下線を引いたりして、逆に何を示しているのかわかってもらえず生徒を混乱させてしまったことがありました。わかるだろうではなく、生徒と共通のルールをもって、生徒がわかるようにことばで書き示し、曖昧さを残さないようにはっきりと伝えなければと反省しました。先輩の先生方の板書を参考にしながら、授業の最後に学んだことがわかるような板書を心がけるようにしています。

今バレーボール部の顧問で、以前の学校では人数の関係上でできなかった団体競技の楽しさを感じています。教材研究、部活と多忙な日々ですが、「努むるは好むに如かず、好むは楽しむに如かず」ただがむしゃらになるだけでなく、生徒と共に何事にも楽しんで精進していきたいと思います。

附属の新しい波 ～オリンピック教育について～



附属学校教育局長
阿部生雄

オリンピック教育とは、国際オリンピック委員会（IOC）が掲げるオリンピズムの理念と、それが展開しているオリンピック・ムーブメントを、国際平和と若者の教育に活用しようとする教育である。既に、世界のいくつかの大学では、付属の「オリンピック・スタディー・センター」（以後OSC）を設置し、IOCや各国のオリンピック委員会（NOC）と連携して「オリンピック教育」（Olympic education）に取り組み始めている。

平成21年、附属学校教育局も、筑波大学の第二期中期目標・中期計画に係る大学全体の年次別実行計画の中で、平成22年度と23年度に「大学と連携し、…(略)…国際平和教育としてのオリンピック教育の実施を検討」するとし、重点施策として「大学と連携し、附属学校の児童生徒を対象とする国際平和教育としてのオリンピック教育の実施を検討する」ことを掲げている。

オリンピズムとは、オリンピック憲章の根本原則において「肉体、意志と精神の全てにわたる資質を高め、調和をもたらそうとする人生の哲学である。スポーツに文化と教育を取り入れることにより、オリンピズムは、努力に基礎付けられた喜び、よき範例を持つ教育的価値、そして普遍的・基本的な倫理原則への尊敬に基づく生き方を創造しようとする」ものとされる。オリンピズムは単なる「競技精神」ではなく、より広義に「努力」によって教育的・倫理的な向上をもたらそうとする教育原理であり「人生哲学」である。また、オリンピズムはそうした個人の修養的価値にのみ収斂するのではなく、より広く国際平和に寄与する理念でもある。同じくオリンピック憲章では「オリンピズムの目標は、人間の尊厳を保つ平和な社会を作り上げるよう奨励することにより、至る所でスポーツを人間の調和的発達に役立つようにすることである」とし、あわせて「オリンピック・ムーブメントの目標は、いかなる差別もなくスポーツを行うことを通して、また友情、連帯とフェアプレーの精神による相互理解を必要とするオリンピック精神において行われるスポーツを通じて、若者の教育によって平和で、よりよき世界を建設することに寄与することである」として平和な世界を建設することを最終的な目標としている。若者の国際平和教育のためにオリンピズムとオリンピック・ムーブメントは理念化され、プログラム化されているといつてよいであろう。

あらゆる障害に対応する特別支援学校を含む11校の附属学校を擁する筑波大学がオリンピズムとオリンピック・

ムーブメントにコミットするのにはいくつかの理由がある。

- ① 少なくとも次のような諸点を列挙できるだろう。
- ① 国際的な大学と附属学校をつくる上で国際平和に対する理解を深めておく必要があること。
- ② 筑波大学には教育、体育、スポーツの分野での伝統と学問的、教育的蓄積があること。
- ③ 本学の前身校である高等師範学校の嘉納治五郎校長は、アジア最初のIOC委員として近代オリンピックの発展とオリンピズムの普及に積極的に取り組んだこと。
- ④ クーベルタン男爵との強い絆を持っていた嘉納先生から、日本で最初のオリンピック教育を学んだという伝統を持っていること。
- ⑤ 日本の最初のオリンピックの一人であるマラソンの金栗四三、大日本体育協会の創設に深く関与した十種競技の野口源一郎をはじめ、その後も数多くのオリンピックを輩出してきたこと。
- ⑥ 筑波大学には小・中・高を網羅する普通附属学校6校、様々な障害に対応する附属特別支援学校5校があり、パラリンピックなどを含むオリンピック教育の先導的試みを発信できること。
- ⑦ 筑波大学は総合大学であり、体育、芸術、教育、医学、国際、人文、社会等と協働して、単に競技力向上だけでなく、国際平和教育の観点からオリンピズムとオリンピック・ムーブメントを推進し、支援してゆく体制を整えることができること。
- ⑧ 将来的には生物、理工、情報等の関係する多様な科学オリンピックとも協調してゆくことも可能であること。
- ⑨ 本学は、日本オリンピック委員会（JOC）や日本オリンピック・アカデミー（JOA）のみならずIOCとの協力関係を保っており、既に大学で「五輪講座」という授業を共通科目として開講している高い評価を得ていること、等である。

現在、IOCやJOC、またJOAや嘉納治五郎国際スポーツ研究・交流センターと連携した「オリンピック研究・教育コア」の設立を具体化しつつあり、大学と附属学校との協同による研究と実践を踏まえたオリンピック教育のモデルを構築し、日本や海外の学校に発信することを意図している。IOCはこの計画に大きな期待を寄せている。筑波大学附属学校は、「オリンピック教育」の拠点を目指すことになる。